

博士論文（要約）

グローバルシティにおける韓人の国際移住および
エスニック空間に関する地理学的研究

申 知燕

論文題目 グローバルシティにおける韓人の国際移住および エスニック空間に関する地理学的研究

氏名 申 知燕 (Shin, Ji Yeon)

グローバル化の進展はかつてないほどの国際移住の増加をもたらしている。先進国の大都市では、様々な民族が混住する事態が進行しており、移住者とエスニック空間に関する関心が高まっている。伝統的な移住研究は国際移住を、国家間の賃金差や政治社会的な環境の差によって開発途上国から先進国に向かって発生する人的移動とみなしてきた。また、国際移住者は一定期間、先進国都市のインナーシティに集住し、次第に地理的・文化的にホスト社会に同化していく存在として認識されてきた。これまでの国際移住と都市空間の関係に関する議論は、このような移住者と彼らの集住地を中心に行われてきた。

しかし近年は、送出国の経済的発展に伴い、世界の政治・経済的中枢機能が集中するグローバルシティと呼ばれる先進国の大都市において、国際移住者の質的变化が生じている。集住地を中心とする従来の議論だけでは、移住者の変化や、彼らが都市空間にもたらす変化を把握することは難しい。このような問題を解決するためには、トランスナショナルリズムの観点から、送出国と受入国、さらには第三国までを多方向に行き来しながら多層的なネットワークを維持する国際移住者の存在に注目する必要がある。彼らの移住がグローバルシティにおいて、いかに行われ、移住者の集住地を含む都市空間をどのように変化させているかを解明することは、そうした議論の基礎となる。

そこで本研究では、グローバル化によって引き起こされた、トランスナショナルな移住の様相を把握し、質的に変化しつつある移住がグローバルシティのエスニック空間および都市空間全体にもたらす影響を把握することを目的とする。そのために、グローバル化以前および以降に移住した新興国出身の移住者を事例に、彼らの居住地選択関連の移住行動を把握することで、トランスナショナルな移住者の都市空間利用、ならびに居住地と移住動機、移住経路、集住地・母国・現地社会との関わり方と関係性を理解しようとする。研究対象としては、ニューヨーク、ロンドン、東京における韓国系移住者（以下韓人）を取り上げ、居住地選択と生活行動を調査する。韓人の移住は戦後の韓国の社会経済の変化と軌を一にしており、今日も海外移住が活発に続いているため、最新の移住動向を比較的把握しやすい。また、韓国は、戦後70年間の間に、発展途上国の状態から急速な経済成長を遂げる中で経済状況が急変した新興国であり、先進国へ流入する多様な形態の移住を時系列的に把握できる、そのため、発展途上国からの国際移住と、

経済発展がある程度完了した国からの移住の双方を把握しやすいという点からも、研究対象として有効であると考えられる。

本研究の現地調査は、2011年から2018年にかけて実施した。ニューヨークでは2011年5月～8月および2012年7月～8月、ロンドンでは2015年8月と2017年3月、6月、2018年2月～3月、東京では2015年4月～2018年12月にかけて現地調査を実施した。研究の手法としては、人口統計および文献資料の分析・地図化や、移住者を対象としたアンケート調査といった定量的手法と、事例地域における参与観察およびインデックス・インタビューといった定性的手法を同時併用したが、特に、インタビュー結果に基づいた言説分析を行うことを主な手法としている。まず、移住関連資料や人口統計をもとに事例地域における韓人の移住とコリアタウンの状況を把握した上で、コリアタウン内外の移住者を対象に参与観察を行い、その過程で知り合った対象者に、雪だるま式サンプリングによって、インタビューおよびアンケート調査を実施した。その他、必要に応じて集住地周辺の景観分析や文献調査なども並行して実施した。

事例調査において明らかになった点は以下の3点である。

第1に、韓国の経済発展が進むにつれて、韓人移住者は永住目的の低賃金労働者からトランスナショナルな移住者へと転換してきた。開発途上国の状態であった1980年代までの韓国は、経済的理由で外国に渡り、ホスト社会に永住するような移住者（以下旧期移住者）を欧米先進国および日本に送り出してきたが、急速な経済成長を遂げた1980年代後半からは、旧期移住者に代えて、高学歴ホワイトカラー労働者や留学生といった、経済的な要因ではなく国際的なキャリア形成を志向する、トランスナショナルな移住者（以下新期移住者）を生み出した。こうした新期移住者は、韓国と受入国を比較的頻繁に行き来しており、永住目的での移民ではない。彼らの特徴としては、グローバルシティにおける自己実現を目標に移住していること、韓国にいる家族や知り合いとのつながりを維持していること、現地社会への一方的な同化ではなく、韓国や第3国で培った文化とアイデンティティを移住先においても維持・活用していることなどが挙げられ、旧期移住者とは移住動機や経路、価値観などを異にする集団である。

第2に、韓人の新期移住者は、事例都市において、市内各地に分散居住する傾向が強く、旧期移住者に比べて集住地への依存度も低い。ニューヨークの旧期移住者は、一旦、インナーシティのコリアタウンに集住し、その後、ホスト社会に同化するにつれて郊外住宅街に再移住している。東京では郊外への再移住は起きず、同じ地区における集住が続く傾向がある。しかし、ニューヨーク、ロンドン、東京における新期移住者は、コリアタウンに集住することなく、最初から本人と子供の通勤・通学圏を考慮して都心部や郊外の良質な住宅街に分散的に居住している。新期移住者がコリアタウンを訪れるのは、飲食店利用や食材購入の時で、これは、新期移住者が旧期移住者に比べて高学歴化し、

職業も専門化しているために、集住地が持つ安価な居住地や職業斡旋、コミュニティの場を旧期移住者ほどには必要としなくなり、ホスト社会の住民とほぼ同じ条件で居住地を選択できるようになったからであると考えられる。近年は、このような韓人の需要から、都心部に韓人商業施設が集積する動きも見られるようになった。

第3に、移住者の分散居住が進むにつれて、集住地が担っていた一部のエスニック機能は、物理的な集住地から離れ、不可視な形で提供されるようになっていく。旧期移住者はコリアタウンに長時間滞在しながら、地域に基づいたエスニック・コミュニティを形成してきた。しかし、新規移住者は、都市内各地に分散して居住しているため、必ずしも集住地を頻繁に訪問できるとは限らない。その代わりに、彼らは物理的な制約の少ないオンラインサイトやオンラインコミュニティを通して情報交換や人的交流を積極的に行っている。彼らが利用するプラットフォームは様々で、SNSを介して母国の家族や親戚、知人との交流を続ける傍で、韓人向けのサイトを利用するかたちで、移住先における中古品の売買、育児やビザ関連情報の共有、新たな人脈作りなども試みられている。このように、移住者の質的な変化に伴って、集住地の形態や役割にも変化が見られており、新时期移住者の流入が少なくなった既存の集住地は新たな存在意義の模索を迫られている。

このような調査結果から、韓人の移住の特殊性に限らず、移住および集住に対する新たな認識の必要性を指摘できよう。グローバルシティの例として取り上げられたニューヨーク、ロンドン、東京は、それぞれ異なる文化や人種構成、韓人移住の歴史を抱えている。しかし、本調査から把握された近年の韓人移住は、トランスナショナルな移動とアイデンティティの維持や、グローバルシティにおける分散居住、さらには、集住地の立地と機能の変化といった点で共通した様相を見せている。これは、韓人の移住が、地域的な脈絡や地域間の関係からもたらされるというよりは、グローバル化の流れによって触発されるものになっていることを示すと考えられる。これは同時に、一定以上の経済発展を達成した地域では、グローバル化に伴って頻繁な越境を行う層が急増するということを意味する。

これらを踏まえると、トランスナショナルな移住者にとってのグローバルシティは、もはや各都市、もしくはその都市を含む国家の固有性に影響された結果としての移住先ではなく、移住者の残りの人生に絶対的な変化をもたらす場所でもないことがわかる。グローバルシティは社会的・言語的・文化的変数に関わらず、国境にこだわらないキャリアの形成を求める多様な層が集まる場所としての性格が強くなるのである。これは、グローバルシティが、二極化された移住が見られる都市であった段階から、より多様な社会経済的な背景を持つ階層の移住者がトランスナショナルな移住を通して、一時的に身を寄せる先としての都市へと変化したことを示唆する。